

令和7年度 入学試験問題

小論文

令和6年11月24日（日） 9時30分－10時30分

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 解答用紙には黒鉛筆、黒色シャープペンシル又は黒色ボールペンを使用すること。
- 3 解答用紙の指定欄に志望学科（コース）、受験番号、氏名を記入すること。
- 4 試験時間内の答案提出、退室は認めない。
- 5 試験問題の内容に関する質問は一切受け付けない。
- 6 文字は、はっきり書くこと。
- 7 試験終了後、本冊子は回収するので、持ち帰らないこと。

学 科		コ ー ス	
受 験 番 号	氏 名	

上欄に志望学科（コース）名、受験番号、氏名を記入すること。

次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

十八世紀のイギリスに、「セイロンの三王子」という童話が^①流布していた。この三王子は、よくものをなくして、さがしものをするのだが、ねらうものはいっこうにさがし出さないのに、まったく予期していないものを掘り出す名人だった、というのである。

この童話をもとにして、文人で政治家のホレス・ウォルポールという人が、セレンディピティ (serendipity) という語を新しく造った。人造語である。

そのころ、セイロン (いまのスリランカ) はセレンディップと言われていた。セレンディピティというのは、セイロン性といったほどの意味になる。以後、目的としていなかった副次的に得られる研究成果がひろくこの語で呼ばれることになった。

大げさな発見などではないけれども、セレンディピティ的現象は、日常の生活でもときどき経験する。

机の上が混乱して、いろいろなものが、さがしてもなかなか見つからなくなっているようなとき、返事をしなくてはならなかった手紙のことを思い出す。その手紙が見当らないから、あちらこちらひっくりかえしてさがすが、出てこない。すると、先日、やはり、さがして、どうしても見つからず、なくしてしまったかと思っていた万年筆がひょっこり出てくる。前によくさがしたはずなのに、なぜか目に入らなかったのである。それが、さがしてもいないときに、出てくる。これも、セレンディピティの一種である。

もうすこし心理的なセレンディピティもよく経験する。

学生なら、明日は試験という日の夜、さあ、準備の勉強をしなくてはと机に向う。すると、何でもない本が目に入る。手がのびる。開いて読み始めると、これが思いのほかおもしろい。ほんの気まぐれに開いた本である。もちろん読みふけったりしようという気持などまったくないのに、なかなかやめられない。

その本というのが、ふだんは見向きもしない^②堅苦しい哲学書だったりするから不思議である。ほんのちょっとと思つてのぞいた本に^③魅入られて、二十分、三十分と読みふけり、^④一夜漬の計画が大きく狂う。これに類する経験が一度もなかった、という学生生活はすくないのではないかとさえ思われる。

^⑤こういうことがきっかけになって、新しい関心の芽が出る場合もある。それならりっぱにセレンディピティである。

[出典：外山滋比古著 『新版 思考の整理学』 筑摩書房]

【問1】

- (1) 下線部①～④の漢字の読みを答えなさい。
- (2) 「セレンディピティ」を、文中の言葉をもちいて15字以内で説明しなさい。

【問2】

下線部⑤に関連して、あなたが今までに得た「新しい関心の芽」をひとつあげてその内容を説明し、それをどのように育てていきたいか論述しなさい。なお、句読点も含めて500字以内で答えること。

以上

※ このページは、メモ用紙として自由に使用して構わない。